

特別支援教育の知見をいかした学校経営X
—新型コロナウイルス感染症の影響下における学校や保育園の現状を考える—

A School Management Based on the Findings of Special Needs Education X :
Consider the Current Situation of Schools and Nurseries under the Influence of the New
Coronavirus Infection

百瀬 和夫*
Kazuo MOMOSE

抄 録

新型コロナウイルスによる学校園の教育活動への影響について、学校再開後に学校園の巡回指導や研修に出向いた時に、主に現場の学校園長などから話を伺うことができた。

昨年度には想像も出来なかった状況の中で、学校園での教師や子どもたちへの新型コロナウイルスの様々な影響について、先生方から伺ったことや自分が肌感覚で感じたこと気づいたことを 2021 年の 1 月の今、記しておきたい。

まず、新型コロナウイルスの学校園への影響について、「長期休業による影響」と「学校再開後の影響」の大きく二つに分けて考えてみた。

昨年、政府主導で全国一斉臨時休校の要請により長期となった想定外の春休み期間が、子どもたちや保護者へ及ぼす影響や学校への影響はどのようなものだったのだろうか。

次に、学校園は再開されたが、教員も子どもたちもマスクの着用やソーシャルディスタンスを意識した活動が行われている現状において、どのような教育活動への影響があるのかについて考察した。

最後に、それらの影響への具体的な対応策について、提言した。

このような状況の中でも、学校園には子どもたちの成長に寄与していく責任があり、日々業務は続いている。想定外の新型コロナウイルスの影響を冷静に受け止め、危機に対して柔軟に対応できるよう、教師の力量アップのために、今後も努力を続けていきたい。

I はじめに

昨年度末から今年度の当初にかけて、新型コロナウイルスの影響で巡回指導や研修に出向くことができない時期が続いた。5 月下旬頃から、ようやく少しずつ学校園の巡回指導や研修に出向くことができるようになったが、研修に出向いた時に、新型コロナウイルスの影響による長期にわたる学校の休校による影響や学校再開後の学校園の対策や子どもたちの様子などについて、現場の学校園長などから話を伺うことができた。

昨年度には想像も出来なかった状況の中で、学校園での教師や子どもたちへの様々な影響について、先生方から伺ったことや自分が肌感覚で感じたこと気づいたことを 2021 年の 1 月の今、記しておきたい。さらに、その影響への対策について提言したいと思う。

さて、新型コロナウイルスの学校園への影響について、大きく二つに分けて考えてみたい。

＊ 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

一つ目は、「長期休業による影響」である。

昨年、政府主導で学校園への全国一斉臨時休校の要請が出たのは、3月2日から春休みまでの期間だった。この想定外の長期の春休み期間が、子どもたちや保護者、学校園へ及ぼす影響はどのようなものだったのだろうか。

二つ目は、「学校再開後の生活様式の変化による影響」である。

学校は再開されたが、どの学校園を訪問しても、教員も子どもたちもマスクを着用したまま授業やその他の活動が行われているのが現状である。

学級は教師と子どもたちとのコミュニケーションで作られていくが、マスク着用における視覚情報不足が、「学級づくり」にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

また、ソーシャルディスタンス、消毒・手洗いの徹底など、これまでと違った生活様式を取らざるを得ないことが、学校園の教育活動にどのような影響を及ぼしているのかについても考えてみたい。

Ⅱ 長期の春休み期間による影響

日本においては、春休み期間は進級、進学に備える大切な時期である。子どもたちにとっては、新しい学校、学年、仲間などとの出会いに胸躍らせる時期でもあるが、今年度はその大切な時期・時間が新型コロナウイルスの影響によって奪われたともいえる。実際に、学校園ではこの長期の休業期間によって、どのような影響が出ていたのだろうか。

1. 子どもたちへの影響

1.1 生活習慣の乱れ

当初の予想通り、校園長など学校現場の先生方から最も多く聞かれたのは、「子どもたちの生活習慣の乱れ」だった。「ゲームなどにはまって夜更かしをする悪習慣がついてしまい、授業中に集中できなかったり覚醒レベルが上がらずボーッとしてしまったりで、生活のリズムを取り戻すのに時間がかかって困っています。」という声は色々なところで校種を問わず聞いた。

確かに、家庭の教育力も様々であり、保護者が子どもたちの報酬系の脳が刺激され常習化してしまうゲーム等の時間をコントロールするのは、非常に難しいと推察される。

登校して学校にいる間、ゲームに触れられないのでイライラして衝動的な行動をしてしまう子どもの事例もあるので、今回のような状況になると、平素学校に登校できている時間だけでも「ゲームに触れない（触れない）時間がある」という大事な役割を学校は果たしていたことに気づくことができた。

1.2 「不登校」の解消！？

一方、「不登校気味だった子どもが、元気に登校するようになりました。」という声を、府県が違うが2件聞くことができた。どちらも保護者が飲食業を営む家庭であることは共通していた。

一つの事例では、平素その3年生の女兒は、居酒屋を切り盛りする両親の姿を見ながら、店の隅っこで閉店時間まで一人で過ごしていたそう。

連日夜遅くまで、両親の営む店で過ごしていることもあってか、朝起きるのも大変で登校しぶりが多く不登校気味になり、保護者も前年度の担任も困っていた。

しかし、両親が休業要請を受け居酒屋を閉店している間、しっかりと面倒を見てもらったことでこの

女兒は不足していた「愛着」を補給し、元気に登校できるようになったそうだ。対人関係の基礎となる「愛着形成」の問題を考えた時、この事実は貴重である。

2. 学校・教員への影響

2.1 「対応の遅れ」と「学校不要論」

公立学校の最大の弱点は、素早い動きがとれないところにある。例えば、遠隔で授業をしようと思っても、市や府県全体で足並みを揃えようとするので、すぐには対処できない。

また昨年、偶然見かけた TV のニュースでは、二人の保護者のインタビューの映像を流していた。一人は私立小学校の保護者で、すでに zoom で授業が進んでいるとのこと、もう一人は公立小学校の保護者で、子どもたちは学校に課題を取りにいくだけで、一向に授業が始まらないと不満を言っている様子。恣意的な感じはしたが、事実であることは確かだ。

そのため、学校に対して子どもたちの学習面だけに価値を求めている保護者の中には、「学校はもういらない。家庭で十分に勉強できるし、YouTube などを使えば、担任の先生よりよっぽど質の高い授業が受けられる」という「学校不要論」の声もネット上では上がっていた。

冷静に考えれば、学校で学ぶ内容は教科の学習だけではないことは明らかだろう。しかし、令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果においても、いじめの認知件数は、小学校 484,545 件（前年度 425,844 件）全体では、612,496 件（前年度 543,933 件）となっており、この数字を見ると、学校は課題解決に向けて十分な結果を出せているとは言えない。このことから、いじめられて命が危ないような場所に子どもをいかせられないと言う声に、抗いがたい気持ちにもなるのも正直なところだ。

2.2 「学級づくり」への影響

「黄金の三日間」という言葉があるように、学年初めの時期は「学級づくり」において非常に貴重な時間である。しかし、今回の新型コロナウイルスの影響で、分散登校（学級の半分の人数ずつ、交互に登校するなど）に取り組んだ学校園も多く、「何か今年はクラスがしっくりこない。」という声も多く聞いた。

クラスの全員がなかなか揃わない中で、学年当初にしなければならない「クラスのくらし方のルールや学び方」に関する共通理解や、さらにそれらを全員に徹底させていく指導が難しかったことが要因だろうと思われる。

Ⅲ 学校再開後の影響

1. 「マスク」の影響

1.1 「マスク」をつけるだけでも…

再開後の子どもたちの学校での過ごし方にも、新型コロナウイルスは少なからず影響を与えている。

一つは、「マスク」である。先生も子どもたちも概ねマスクをした状態ですごしている。こだわりのある子どもたちや幼い子どもたちにこのマスクを付けてすごすという習慣を身に着けるまでが大変だったという声もよく聞いた。

幼い子どもたちは、すぐにマスクを外してしまうし、触覚に敏感な子どもたちはマスクへの違和感があり、慣れるまで繰り返し繰り返し粘り強く指導を続けてやっと慣れてきましたという声もあった。

やはり、マスクをつけるという大人にとって簡単にできることも、困っている子どもたちにとっては容易ではないことを改めて認識することになった。

1.2 「マスク」と「学級づくり」

さて、巡回指導に出向いた先の小学校で、こんなことがあった。特別支援学級だったのだが、教室に入ると楽しい音楽をかけて、危険を考慮してソフトな棒を使って踊っているところだった。(写真1)

しばらく、教室の後ろから先生と子どもたちが踊っている様子を眺めていたが、正直全然楽しく感じなかった。

流れている音楽がこんなに軽快で動きも楽しいはずなのに何でだろうか？と違和感があったが、その原因にすぐに気が付いた。

「マスク」のせいで、先生の表情も子どもたちの表情も分かり辛く、楽しさが伝わってこないのだ。

その訪問の次の週のこと、今年度はコロナウィルスの影響で夜間講座を対面で実施することが難しい時期があったため、ZOOMによる遠隔の講座を実施する機会があった。

その際、ある小学校の先生から「子どもたちがマスクをしているので、表情が分かりにくくて困っています。どのようにしていけば良いのでしょうか。」という質問があった。

やはり、「マスク」は重要な「視覚情報」であるお互いの表情を隠してしまうために、お互いの気持ちの伝わり辛さという側面がある。

ハーバード大学のティモシー・ウィルソン教授によると、人は僅か1秒間に五感から1100万要素以上の情報を脳に送信し、その内40要素を脳で処理をしている。その仕組みを「適応的無意識」と呼んでおり、その1100万要素の内、両目だけで1000万以上の情報量となり「視覚情報」の重要性を示している。

つまり、「マスク」はウィルスだけではなく、皮肉なことにコミュニケーションにおいて最も情報量の多い表情という「視覚情報」までもを、ブロックしてしまっていることになる。

右の写真2は、ゴリラの写真である。一目で人間と明らかに違うのは顔が概ね毛で覆われているところである。自然の摂理から言えば、人間ほど表情を読み取る必要がないからである。一方、私たち人間は、お互いの表情を読み取り、きめ細やかコミュニケーションを取る必要がありそれが、幼児期の心の発達とも深く関連している。

次に写真3を見てほしい、写真2にマスクをつけてみた。子どもたちも先生もお互いにこの状態でコミュニケーションを取り合って、意思の疎通を図っていることになるが、表情が読み取れないということは、ゴリラと同じレベルでがんばっていることになる。

「学級づくりはコミュニケーションであり、クラスの今の姿は、4月から今日までの子どもたちと先生とのコミュニケーションの結果に過ぎ



(写真1)



(写真2)



ない。」とこれまでも先生方に訴え続けてきた。

(写真3)

さて、本来日本人は感情をストレートに表現しない民族だと言われている。そこに今回の新型コロナウイルスの影響によって、ますますコミュニケーションがとり辛くお互いの気持ちが分かりにくくなっていることを意識して、心の通い合う学級経営を目指す必要が学級担任にはあるだろう。

しかし、日々の学級経営に表情が読み取りにくいということには、意外なプラス面もあるかもしれない。いつも怖い表情だったり、不機嫌だったりする先生の表情も、やはり読み取りにくいからだ。

この分かりにくさは、「信用」や「信頼」を深めていくのに時間がかかることを示している。そのため、例年より、クラスが良くなっていくスピードも、崩れていくスピードもゆっくりになっている筈である。

2. ソーシャルディスタンスとふれ合い

さらに、コロナウイルスの影響から「ソーシャルディスタンス」が言われるようになり、お互いの距離をこれまで以上に保つ必要が出てきた。

スキンシップは人間の対人関係の土台となる「愛着形成」のために大切な行為であるにもかかわらず、それが機能しなくなるということは、子どもたちの心の発達や支えになる部分が奪われていることになる。

昨年の4月当初から、先にも述べたように、お互いの分かりにくさによって例年より「学級が機能しなくなる状態」になったり、不登校が増えたりする時期が遅くなるのではないかと予想していたが、やはり現場からは11月頃からそのような状況が生まれつつあるという話が耳に入るようになった。どこかの機関で、是非とも学校状況の調査をお願いしたいところだ。

では、「マスク」や「ソーシャルディスタンス」によって互いのコミュニケーションが十分で無いのであれば、それを補う必要がある。次にその具体的な対応策をいくつか考えてみたい。

IV 「視覚情報」を補う対応策

1. 「表現力」を高める

日本人はその国民性から、欧米人に比べて動作が小さく、大きな手ぶり身振りで話す習慣が無いと言われる。今回の新型コロナウイルスの蔓延による特殊な状況下では、欧米人並みに動作を大きくして、表現力を高めるように意識していきたいところだ。

また、「あの人笑っているけど…目は笑っていない」などと言われるのはもっての外で、「目は口程に物を言う」と言われるように、「マスク」で隠れていない「目の表現力」を高め、「目力」を意識することも大切にしたい。

2. 「言葉」の使い手になる

日本では「阿吽の呼吸」と言われるように、言わなくても互いに分かり合えることが重要視される傾向がある。しかしながら、「視覚情報」が十分で無いのであれば、言葉による「聴覚情報」の重要性が増すことは言うまでもない。

したがって、これまで以上に「言葉」の使い手になる必要があり、そのためのポイントについて以下に述べる。

(1) 言葉と脳の性質について

近年の脳科学では、言葉と思考の順番について、「言葉が先」で「思考は後」ということが分かってき

ている。特に「口癖」は、十分に思考してから「言葉」として発している訳ではなく、単なる「クセ」として無思考で発語しているだけである。

言葉の通りの人生になるとも言われる「言葉の管理」は、教師のたしなみとしても非常に重要である。

(2) 脳は否定語をイメージできない

かつて小学校の校長時代、生徒指導の課題が大きい学校であったため、子どもたちに「〇〇するなよ！」と否定語で指導している先生に、言葉の使い方を変えるようお願いしたことがある。

例えば、子どもたちに「廊下を走るな！」と言うと、廊下を疾走しているシーンしかイメージできない。だから、「廊下を歩きましょう！」と肯定語で話せば、歩いているシーンを思い浮かべることができる。

熱量の高い教師は、子どもたちへの指導が熱心なあまりに、ついつい「〇〇してはいけない！」と子どもたちに話してしまいがちになる。しかしながら、教師は意識して肯定語で話せる力をつけなければならない。

(3) プラスの言葉かけのコツ

困っている子どもたちは、原則「生産的能力」が低いので、どうしても注意したり叱ったりしなければならない場面に出くわしてしまうものだ。その時、教師はどのように言葉をかければ良いのだろうか。「何やってるんだ！」といきなり叱ったり怒ったりするのは、もっての外である。

困っている子どもたちは普通ではない困った言動をしているのだから、最初に教師が発するべき言葉は「大丈夫？（優しく）」である。

時折、訪問した学校の校長先生から、「初期対応を間違えまして…」と相談を受けることがある。

「どういうことですか？」と聞き返すと、大抵は「家庭訪問に行くべきところを電話で済ませてしまっで…」と返答される。

「校長先生、それ多分違います。この事案があった時に、最初に出会った先生はこの子どもにどのような言葉を投げかけましたか？」と質問すると、「分からない。う〜ん…」となることも多い。

実は、生徒指導上の「初期対応」とはまさにこのことである。最初のファーストコンタクトで、教師が不適切な言動をしてしまっている子どもに「大丈夫？」と声を掛けることができた瞬間、解決行きの上り電車に乗ることができる。「何やってるんだ！」と理由も聞かずに怒りの感情を乗せた言葉を子どもに浴びせた瞬間、ごちゃごちゃ行きの下り電車に乗ってしまったことなる。

上記以外にもポイントはあがるが、少しずつでも教師が「言葉の力」を高めることで、子どもたちとのコミュニケーション不足を補い、より良い学級づくりを目指していけるのではないかと思う。

V まとめ

近年の大きな震災や、今回の新型コロナウイルスの影響のような強いマイナス面にさらされると、平時では見えにくかった側面も見えてくるものだ。

今回述べた「マスク」にしろ、「ソーシャルディスタンス」にしろ、思いもしなかったことが、じわじわと教育活動に影響を与えている場合もある。

この新型コロナウイルスの問題は、マズローの欲求段階のピラミッドで考えると基本的欲求における下から2番目の「安全欲求」に直結しており、まさしく「命」に関わる問題である。

一方、経済の問題は下から3番目の「社会的欲求」である。「経済で死ぬか、コロナで死ぬか?!」という言葉があるように経済の問題で職や社会的基盤を失った人間は命を絶つ場合があり、やはり「命」

に関わる問題である。つまり、どちらも「命」に関わる問題であるために、これほど舵取りの難しい課題もないと思われる。

しかしながら、このような状況の中でも、子どもたちにとって、成長に関わる貴重な時間は刻々と過ぎていく。まさに「学級づくり」は待ったなしである。

新型コロナウイルスの影響を冷静に受け止めつつ、できる限り臨機応変な対処ができるように、教師の力量アップのための努力を今後も続けていきたいと思う。

参考文献

- 1) 佐藤綾子著『オンラインで伝える力』[幻冬舎]、2020（令和2）年
- 2) 令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf
- 3) 加藤俊徳著『日本人が最強の脳を持っている』[幻冬舎]、2016年（平成28）年

Abstract

I heard from principals about the impact of the new coronavirus on educational activities in schools when I went to schools on the job training and in-service training after the reopening of schools.

I would like to write as of January 2021 about what I heard from teachers and what I felt firsthand about the various effects of the new coronavirus on teachers and children in schools under conditions that were unimaginable last year.

First, I thought about the impact of the new coronavirus on schools in two ways: the impact of the long holidays and the impact after schools reopen.

What was the impact of the unexpected spring break, which was lengthened by the government's request for temporary closure of schools nationwide last year, on children and parents, and on schools?

Next, although the school was reopened, I considered what kind of educational activities would be affected in the current situation where teachers and children were wearing masks and conducted activities with social distance. Finally, I proposed specific measures to deal with these impacts.

Even under these circumstances, schools have a responsibility to contribute to the growth of children, and they continue to make efforts every day. I will continue to make efforts to improve the competence of teachers so that they can calmly accept the impact of the unexpected new coronavirus and respond flexibly to the crisis.